

爆

身

カバーフォト Aenne Bolze/Eyeem/Getty Images
カバーデザイン 岩郷重力 + WONDER WORKZ。

1

乃木坂^{のぎざか}から山王下^{さんのうした}に抜ける赤坂^{あかさか}通りに、依頼人が指定したホテルはあった。一階が駐車場で、二階がロビーとレストラン、三階から八階までが客室という造りだというのを、ホームページで確かめてある。外国人観光客が多く泊まる中クラスのホテルのようだ。

依頼人と待ち合わせた午後三時にはまだ十五分ある。キリは歩道で足を止め、あたりを見回した。アンテナ[、]にひっかかるものはなかった。路上駐車しているのはコンビニエンスストアのトラックとクリーニング店のバン。不自然にたたずむ者もない。

依頼のメールをうけとつたのは三カ月前だ。

ニュージーランドの南島、クイーンズタウンに住んでいるトマス・リーという人物からで、日本滞在中の三日間を警護してもらいたいという内容だった。具体的な話は会ったときにする、という。来週から、三週間という、キリとしては長期の仕事が入っていた。したがってリーの依頼はタイミングとしてはぴったりで、文法の怪しい、リーの英文メールでは具体的な警護内容も訊きづらく、三日間ならばと、応じることにしたのだ。

リーという姓、アジア系の住民が人口の一割を超すというニュージーランドの国情を考えると、

依頼人は中国系である可能性が高かった。ニュージーランドで生まれたのではなく、移住してきたと考えるなら、文法が怪しいのも納得がいく。

リーは職業を「フィッシングガイド」だと記していた。確かに日本とは比べものにならない大物が釣れるなど、ニュージーランドでは釣りが盛んらしい。

国土の面積は、日本の七割ほどあるのに、人口がわずか四パーセント弱の四七六万人では、大物が多いのも頷ける。

だが「フィッシングガイド」という職業が、命を狙われる理由だとはとうてい思えない。

しかもリーが望んでいるのは、日本での警護だ。プロのボディガードであるキリの存在を、リーがどうやって知ったのかはわからないが、インターネットでただ検索しただけなら、大手の警備会社トップにでてくるし、料金もそちらのほうが安い。

キリのことをリーに推薦した人物がいたのだ。つまり、そういう知り合いがいることも含め、ただの「フィッシングガイド」である筈がなかった。

キリは興味を惹かれた。リーは誰から身を守る必要を感じているのか。それがたとえば、ニュージーランドにきたときにガイドをしてトラブった暴力団の親分だともいうなら、とんだ肩すかしだが、メールには、そうした依頼とは異なる雰囲気があった。

ニュージーランドのオークランド空港を立つ成田いき直行便は、連日午後四時四十五分に到着する。

赤坂で午後三時に待ち合わせるには、遅くともきのう着の便で来日していなければならぬ。つまり最短でも二十四時間近くを、この日本でリーは過しているのだ。

通常、身辺警護を求める外国人は、来日直後から離日直前までを契約期間とする。

ハリウッドスターやミュージシャンの警護をキリがうけるときも、それがふつうだ。

つまりリーには、日本でボディガードを必要とする期間と、必要としない期間があるということになる。

キリと合流したあと、リーがどこで何をするつもりかはわからないが、そのときいっしょにいてもらいたいということなのだろうとキリは理解した。

リーの年齢は六十歳とある。盛り場で乱痴気騒ぎをするつもりなので守ってほしいというわけでもないさそうだ。

国内に住む依頼人なら、キリは必ず前もって打ち合わせをする。どんな相手から守ってもらいたいのかを知らなければ、自分の警護方法が合っているかどうかの判断ができないからだ。

ボディガードという仕事は、時間と人員をいくらでもふくらませることができる。アメリカ大統領の警護を考えれば、それはすぐにわかる。車で移動するときには沿道に警官が立ち、見晴らしのよいビルなどに狙撃手が配置される。

民間人でそこまでの警護を必要とする者はいないし、暗殺の危険にさらされることもない。それでも確実に危険から逃れようとするなら、たったひとりのボディガードにすべてを託すのは、賢明とはいえない。

打ち合わせの場で、キリは必ずそれを相手に告げる。

身辺警護の基本は、危険の回避だ。依頼人を身体生命の危険が生じる状況におかないことが、職務の第一歩である。

キリを雇^{やと}いたい依頼人は、たいていの場合、確実な危険を予測している。つまり、襲撃者の存在が前提となっている。だが襲撃者からただ守るだけでは警護期間が長期化する。襲撃者は、依頼人がスキをみせるまで待ちつづけるかもしれない。

ボディガード一名ではその対応に限界がある。そこでキリはあえて襲撃を待ちうける方法をとることがあった。反撃し、二度と同じ考えをもたないようにさせる。

決して失敗は許されない。失敗すれば依頼人は傷つくか、最悪の場合、死亡する。

キリは、自分の警護方法をまず依頼人に説明する。そしてこのやり方に不安を感じるならば、警護はできないと告げる。

今までにそれで失敗したことはあるかと、たいていの依頼人は訊^きねてくる。キリの答はいつも同じだ。

「ありません」

不意に地響きを感じ、地面が揺れた。地震か、と思った直後、頭上で爆発音が轟^{とん}いた。見上げると、粉々になったガラスがきらきら光りながら落下してきた。とっさにキリは着ていたジャケットの襟^{えり}をつかみ、頭からかぶった。

手の甲にガラス片が刺さる痛みとともに、ジャケットにばらばらと当たる感触が伝わった。

女の悲鳴が聞こえ、滝のようにふり注いだガラスに、通りかかったタクシーが急ブレーキを踏んだ。

ガラス片の雨はすぐにやみ、キリはジャケットをおろした。左手の甲に小さなカケラが刺さり血がにじんでいる。それを抜きとり、再び頭上を見上げた。砕^{くだ}け散った窓から煙があがっている。二階だった。

キリは駐車場を走り抜け、ホテルの入口をくぐった。非常ベルが鳴っていた。自動扉の内側に、うずくまった制服の従業員がいる。

正面がエレベータホールだが、そこには向かわず、キリはかたわらの非常階段を駆けあがった。

踊り場までくると、うつすらとモヤのような白い煙がたちこめていた。それをつき切り、二階にあがった。

さまざまなものが壊れ、とび散っていた。ウエイトレスらしい制服姿の若い女が倒れている。

歩み寄ると、血を流してはおらず、呆然^{ぼうぜん}とした表情でキリを見上げた。

「大丈夫ですか」

「は、はい。ただ音でびっくりして……」

「怪我^{けが}は？」

「してないと思います」

キリはその場を離れた。階段をあがったところがレストランの入口で、ロビーをはさみ向かいにフロントがある。

爆発はロビーではなく、レストランの内側で起こったようだ。

その証拠に、ロビー内にものは散乱しておらず、レストランの内側の損傷がひどい。テーブルや椅子^{いす}、植木鉢が倒れている。白い煙が濃いのもレストランの内側だ。

非常ベルが鳴りつづけてはいるが、スプリンクラーは作動していない。レストランの入口をくぐってすぐに、ウエイトレスがもうひとり倒れていた。ひっくりかえったテーブルの下じきになり、立ちあがろうともがいている。それをどけ、キリは手を貸した。

「大丈夫ですか」

「は、はい。いきなりバーンで、音がして、テーブルが倒れてきて……」

そのウエイトレスにも怪我はなかった。

キリはレストランの奥をのぞきこんだ。つきあたりの窓が砕け散り、テーブルや椅子が倒れている。

「他に誰いましたか」

「あの、お客さまがひとりだけ……」

ウエイトレスの唇が震えた。

「どこに？」

「一番奥の席です。待ち合わせだとおっしゃって……」

キリはウエイトレスのかたわらを離れ、奥へと進んだ。さまざまなものが散乱し、靴底がバリバリと音をたてた。何かが焦げた匂いと揮発臭が鼻をついた。

人の姿はなかった。焼け焦げた木のようなものが散らばっている。

キリは足を止め、下を見た。指が一本、落ちていた。何かの紋章の入った金の指輪がつけ根にはまっている。

急に背後が騒がしくなった。防護服を着け、ヘルメットをかぶった消防隊員が駆けつけたのだっ

た。消防隊員が怒鳴った。

「さがって！ さがりなさい！」

キリは言葉にしたがった。

「お客さま、避難して下さい！ 当ホテルからすぐにで下さい！」

フロントからでてきた従業員がメガホンを手に叫んでいる。キリは階段を降りると、ホテルの外にでた。

22

「じゃあ二階のレストランにいたのは、お前のクライアントだったのか」

金松が訊ねた。二機捜から一機捜に異動になったばかりだという。消防隊員につづいて現れた警察官の中に金松の姿を見つけ、キリは手招きしていた。

「まだ依頼をうけたわけじゃない。メールのやりとりをして、これから話すことになっていた」

金松は空を見上げ、息を吐いた。四十を超えたばかりで、冷蔵庫のような体つきと潰れた耳が印象に残る刑事だ。

「悪いが最寄り署まできてもらうぞ。マルガイは黒焦げに焼けている。身許確認する時間がかかりそうだな」

キリは頷いた。金松はキリの仕事と、そのやり方をよく知っている。

「俺も情報が欲しい」

赤坂警察署まで、車で五分とかからなかった。金松を含む四人の刑事から、キリは事情聴取をされる一方で、何が起ったのかを、おおよそ理解した。

火事が起ったとき、レストランに客はひとりしかいなかった。大柄な六十歳くらいの東洋人で、二時三十分過ぎに店に入ってきた。一番奥の席にすわってコーヒーを注文し、誰かを待っているようすだったという。

レストランの利用者は、朝晩はホテルの宿泊客、昼はランチタイムの客が大半で、午後二時から五時くらいまでの客は、ほとんどいない。

ウエイトレスのひとりがコーヒーを届けたとき、男は携帯電話をいじっていた。

そして爆発が起った。

火事は、男か、その周辺で発生した。大音響とともに男の体が炎に包まれた、とウエイトレスは証言した。背後のガラス窓と、すわっていたテーブル席も粉々になり、白い煙がたちこめて、その煙がうすらぐと、男の姿はどこにもなかった。あたりに黒焦げの体がとび散り、焦げくさい匂いがたちこめていたという。

キリが駆けつけたのはその直後だった。

「トマス・リーというニュージールランドのパスポートを提示した客が、確かにあのホテルに泊まっている。連絡がついていない。現場にいたのが、そのリーだという可能性は高いな」

金松がいった。

「リーは赤坂のクレタホテルに泊まるので、今日の午後三時に二階のレストランに来てほしいと、英文でメールをよこしていた」

「あなたの仕事はボディガードだそうだな。つまり、そのリーという男は、誰かに狙われていたのか？」

金松より少し年かきの、杉田^{すぎた}という刑事が訊ねた。

「でなければ、ボディガードを頼もうとは考えないだろうな」

キリは杉田を見た。一番若い、久米^{くめ}という三十そこその刑事がキリの前のテーブルに手をつきのぞきこんだ。金松以上にがっちりとした体つきをしている。

「失礼だけど、プロのボディガードというには、華奢^{きゃしゃ}じゃないっすか、体が」

「体だけじゃなく頭も使う商売なんでね」

キリがいうと、口をへの字に曲げた。

「こんな風だが、こいつは腕が立つ。ひとりで十人近くをのしちまったことがあるんだ」

金松がいった。

「本当ですか!？」

久米は信じられないというように金松をふりかえった。

「本当だ。俺が麻布にいたとき、六本木^{ろっぽんぎ}にネイサン・ジョーンズが遊びにきた——」

「ネイサンで、ハリウッドの役者の？」

「そうだ。入ったキャバクラが大騒ぎになったが、その場に城東^{じょうとう}連合のチンピラが十人ばかり飲みにきていて、ケンカになった。ネイサンには、アメリカから連れてきたボディガードが二人ついていたが、向こうとちがつて丸腰だから、城東の連中にフクロにされちまった。ネイサンがこっち用に雇っていたのがこの男だ。俺たちが呼ばれていったときは、城東の連中は、肩や肘^{ひじ}の関節を外

されて動けなくなってたよ」

「すごいな。どこでそんな技を身につけたんですか」

久米の言葉づかいがかわった。

「おおげさにいつている。十人もいなかったし、勝手につまずいたり転んだだけだ」

キリはいつた。金松はにやついた。

「謙虚^{けんこ}だろう。ネイサンは、五十万ドル払うから、アメリカでもボディガードをやってくれと頼んだらしいじゃないか。それをにべもなく断わったって話だ」

「本当なら、たいしたもんだ。あんたはすご腕というわけだ」

杉田がいつて、久米を押しつけた。

「そんなすご腕なら、自分のクライアントがどんな奴^{やつ}に狙われていたか、当然知っているよな」

「金松さんにもいつたが、まだクライアントじゃなかった。誰から守ってもらいたいのかを、これから訊く予定だったんだ」

杉田は顎^{あご}の先をかいた。無精ヒゲがのびていて、ぼりぼりと音がした。

「消防隊員やホテルの人間の話じゃ、あんたは出火直後にレストランにとびこんできた。心当たりがあったからじゃないのか」

「クレタホテルの前に、少し早めについて、ようすを見ていたら小さな爆発が起こった。それが待ち合わせた二階だとわかったんで、何かあったと思ったんだ」

「だがふつうは爆発のあった現場にとびこまないだろう。また爆発があるかもしれんじゃないか」キリは肩をすくめた。

「もし依頼人が火事に巻きこまれていたら助けたかった」

「火事の原因は何だと思う？」

金松が訊ねた。キリは金松を見た。

「俺にわかるわけがない」

「あんたなら何かに気づいた筈だ。当てずっぽうでいいから、いつてみるよ」

キリは息を吸いこみ、目を閉じた。現場のようすを思いだす。

もし爆弾がしかけられていたなら、火薬の匂^{にお}いがしたり、それらしい部品がとび散っていた筈だ。が、そういう匂いはず、部品も見えていない。

何かが焦げたような匂いと揮発臭、あとは指輪のはまった指だけだ。

目を開き、答えた。

「火薬の匂いはしなかった」

金松は頷いた。

「他には？」

「指が一本落ちていた。DNAの照合に使えるだろう」

「比べるサンプルが手に入れば、だ。リーの部屋に何かあればいいんだが。あの時間だと部屋の掃除^{そうじ}は終わっている」

金松は無表情に答えた。

「爆弾じゃなく事故ということなら、我々の仕事はぐっと楽になるんだがね。その、リーという人物は何者なんだ？」

杉田が訊ねた。

「メールによれば仕事はフィッシングガイドとなっていた」

「フィッシングガイド？」

久米が訊き返した。

「何ですか、それ」

「文字通り、釣りのガイドだろう」

杉田が答えた。

「そんな商売、あるんですか」

「ニュージーランドには、世界中から大物狙いの釣り師がくるらしい」

「へえ」

「リーは、ネイティブのニュージーランド人じゃなかったと思う。メールの英語がところどころ怪しかった」

キリはいつた。

「移民か」

金松がつぶやいた。

「そうになると、どこからきたか、だな。中国か台湾か、それとも他の国か。ニュージーランドにくる前の因縁で、お前にボディガードを頼みたかったのかもしれないな」

「そうかもしれないが、まだ殺されたと決まったわけじゃないのだろう？」

キリが訊き返すと、刑事たちは顔を見合わせた。

「現検しただが、火薬の匂いがしなかったという、あんたの話を信じたいね」

金松がいつた。

「日本にきたばかりのニュージーランド人が爆殺されたなんて捜査は願ひ下げ、か？」

キリがいうと、金松は首をふった。

「それ以上いうな。俺たちはこれでも、仕事を一生懸命やっているんだよ」

キリが赤坂署をでたのは、それから一時間後だった。タクシーを拾わず、徒歩でクレタホテルに戻った。

ホテルの周辺にはテレビの中継車が何台も止まり、出入口は警察に封鎖されている。

リーが生きているなら、メールで番号を教えた携帯に連絡があっておかしくない。パソコンにメールが届いても、携帯に転送されるが、それもなかった。

レストランの奥にすわっていて焼死したのが、トマス・リーだという可能性は高い。

もやもやとした気分だった。

まだ依頼をうけていたわけではないから、自分が任務に失敗したのではない。だが、もしあのとき外で待たなければ、リーを助けられたのではないか。

いや、そこまでの緊張感には自分にもなかった。むしろ火事の巻き添えになったろう。

誰かが爆弾を投げこんだのではないことは、はっきりしている。爆弾だったとしても、前もってレストランにしかけられていたか、リーが身につけていたのだ。したがって、キリにも防ぐことはできなかった。

シートでおおわれた二階の窓を見上げ、キリは深々と息を吸いこんだ。

今の自分にできることは何もない。乃木坂の駅に向かって、赤坂通りを歩き始めた。

前方にハザードをつけた黒のアルファードが止まっていた。爆発のときにはいなかった車だ。そのアルファードのかたわらに、大柄の男が立っている。

ひと目でサラリーマンではないとわかった。スーツを着てネクタイをしめているが、首のつけ根まで肩の筋肉が盛りあがっていて、はち切れそうなほどシャツの胸がふくらんでいた。ボディビルダーというより、格闘技をやっている体つきだ。

男はキリを認めると、アルファードをふりかえった。スライドドアが開いている。中の人物と言葉を交し、通せんぼをするように立ちはだかった。両手をうしろで組み、ぶあつい胸をそらして、歩道をふさいでいる。

キリは無言で男の顔を見た。ことさら凄むような表情は浮かべていない。つまりプロだ。

「キリさん、だな」

アルファードの中から声がかげられた。

七十くらいに見えるスーツの男がいた。シートではなく車椅子にすわっている。痩せて、骸骨のような体つきだが、目には鋭い光があった。

キリは否定も肯定もしなかった。大男から敵意は感じないが、必要とあれば襲いかかってくるだろう。この男の手下と見て、まちがいない。

「失礼。私はムツキ、という」

「ムツキ？」

姓なのか名前なのかわからない。

「一月生まれだね。だから睦月、と呼んでもらっている。君の、キリといっしょだ」

渾名^{あだな}ということか。キリは睦月と名乗った男を見つめた。

「そのホテルで騒ぎがあった。そのことで話したい」

睦月は落ちついた表情でいった。

「その話はもう警察とした」

キリは告げた。睦月は頷いた。

「わかってる。君を待っていたんだ。赤坂警察署の前で待っていてもよかったのだが、必ずあのホテルに戻ってくるだろうと思っただけ。ここで待つことにした」

「なぜ俺が戻ってくると思ったんだ？」

「口のききかたに気をつける」

大男が抑揚のない口調でいった。

「かまわない。私にどんな口をきこうがキリさんの自由だ。大切なのは、嘘をつかないことだ」
睦月はいった。そして言葉をつづけた。

「君は腕ききのボディガードだ。目の前でクライアントを殺されて知らん顔はできないだろう」

「まだクライアントになつてはいなかった。話を聞いて、契約するかどうかを決めるつもりだった。その前に火事が起きた」

「なるほど」

睦月は頷いた。

「では彼のことは何も知らんのだな」

「トマス・リーという名前だけだ。ニュージーランドでフィッシングガイドをしている、とメールにはあった」

「フィッシングガイド」

陸月はつぶやき、笑った。

「なるほど。あの男らしい」

「あんたは知り合いだったのか」

陸月はすぐには答えなかった。やがて口を開いた。

「三カ月ほど前、あの男から、日本で腕の立つボディガードを紹介してほしいと頼まれた。私は君を推薦した」

「あんたが？」

キリは陸月を見つめた。

「私は顔が広いほうではないが、知り合いは皆、親切だね。私の知りたいことを教えてくれる」

「誰かが俺のことをあんたに教えた、というわけか」

「警視庁にいる知り合いだ。畑山はたけやまという警視だ」

以前の仕事で会った記憶がある。そのときは捜査一課の管理官だった。

「あんたとトマス・リーは、どんな関係だったんだ？」

「教えてもいいが、それには条件がある」

「何だ？」

「あの男に何が起ったのかを調べてもらいたい」

「火事が起きて死んだ」

キリはいつた。

「その火事は何が原因だ？」

「調べるのは警察の仕事だ」

陸月は深々と息を吸いこんだ。

「彼らにできるのは、事象の表面を見ることだけだ。その内側まで見通すのは難しいだろう」

「何がいいたいのかわからないな」

「また、連絡をする」

陸月は会話を切りあげようとした。

「待った。俺には来週から別の仕事が入っている。あんたの希望には沿えない」

陸月は意味ありげにキリを見つめた。

「大丈夫だ。君の時間は確保する」

その言葉が合図だったかのように、大男がスライドドアを外から閉め、運転席に乗りこんだ。アルファードはキリをその場に残して走りさった。

3

品川駅しんがわの港南口から少し離れた一角にキリの住居はあった。築三十年は経過している工場兼住宅

で、「ハツ山螺子製作所」という看板が、今も掲げられている。

看板の下のシャッターが出入口だ。キリは鍵を開け、シャッターを引きあげた。自動的に照明が点り、油染みのあるコンクリートの床が照らしだされる。機械類を撤去したあとに、トレーニングマシンやサンドバッグをおいた。その奥は、十坪に満たない、小さな平屋だ。タチの悪い街金の追いこみにあい、債権を買った極道に生命保険をかけられた元のもち主を救った報酬として、無期限で借りている。

工場部分でブーツを脱ぎ、キリは畳をしいた居間にあがった。壁ぎわの棚から、さっと黒い影がとびおると、小さく鳴いた。飼っている黒猫、シャドウだった。

シャドウは自分の姿を見せつけるようにキリの前をよこぎり、エサをおいたボウルに近づくと、カリカリと音をたてて食べた。

キリは居間の中央においた卓袱台の前であぐらをかいた。卓袱台の上にはパソコンがある。

立ちあげて、トマス・リーとのメールのやりとりを読みかえした。何か見落としたことはないか、探す。

金松は、レストランで死亡したのがトマス・リーだと判明したら、やりとりしたメールを警察に提出してもらいたいといい、キリはそれに同意していた。

「ディア・ミスター・キリ」で始まる文面はそっけないというよりは、発信者が英文にさほど慣れていない印象があった。

キリの存在をどうして知ったのかには触れておらず、期日に警護を依頼したいということしか記されていない。

それに対しキリは、依頼をうけることは可能だが、その前に仕事の内容について相談をしたい、と返した。

その結果が、今日の午後三時、赤坂クレタホテルだった。レストランがあればそこで、もしなければロビーで、とリーは打ってきたのだ。

メールのどこにも、何から自分を守ってもらいたいのかは記されていない。

依頼文としては珍しい。ふつうボディガードを雇うほど身の危険を感じている人間は、自分に危害を加える存在について情報をもっている。ストーカーであつたり、恨みを買った相手がわかつていて、そのことをまっ先にキリに知らせようとするものだ。

名前まではあげなくとも、こういう人物が、とか、こうしたグループが、という表現が必ずある。が、リーの依頼には、そうしたものはなかった。ただ自分の警護を依頼したいというだけだ。

語学力の問題なら、文章ではうまく説明できないとリーが考えた可能性はある。

面と向かつての会話だと、互いにあやふやな部分を補完しあって同じ結論に達することができ、文章でのやりとりの場合、不正確な語句による誤解を避けようと、情報量が少なくなる傾向があるからだ。

メールを何度読んでも、手がかりはなかった。

つづいて「睦月」という渾名をインターネットで検索してみた。ヒットする者はいない。

畑山に直接問いあわせようにもキリは連絡先を知らない。

キリは佐々木にメールを打って、調べてもらうことにした。企業のネットセキュリティの専門家で「K O J I R O」というオフィスをかまえ、キリのホームページを作成、管理している。商売柄、

裏社会の情報に通じている。ただ活動している時間帯が常人と異なるので、いつ返信がくるかわからない。

風呂の準備をした。生臭いにおいが体にしみついているような気がしていた。

パソコンが着信音をたてた。佐々木だった。こんなに返信が早かったのは初めてだ。

『睦月に会ったのか?! すげえ』

『何がすごい?』

『本物のフィクサーだ。表にはほとんどでないが、警察や情報機関、暴力団、すべてに顔がきくって話だ』

フィクサー。キリは息を吐いた。

『フィクサーを自称する奴に、ろくなのはいない』

『睦月は本物だ。俺がアドバイザーをしている大手生保も何度か、睦月の世話になってる。車椅子にのってたか』

『のっていた』

『だったら本物だ。写真はないが、特徴として、車椅子の痩せた爺い、という情報がある』

『いつ頃からフィクサーとして活動している?』

『詳しくは俺もわからないが、暴排条例がきつかけだといわれている。条例のせいで直接交渉を禁止され、企業や役所は反社とのパイプを失った。だからといって暴力団が消えてなくなったわけじゃないし、口座や不動産ももっている。ビジネス上の話をする人間が必要だ。それで睦月があいだに立つようになった。どちらからも信頼されてなきゃやれない』

『あいだに入るだけで大きな力をもつようになったのか?』

『もともと睦月は、そういう交渉に長けていたようだ。抗争の手打ち役を頼まれたり、外国の情報機関がやくざを下請けに使うときの仲立ちをしていた。パブルの頃は金融機関とやくざをつないで、派手にやっていたらしい。パブルが弾けて、そういう奴の大半は殺されるか、どこかへ飛んじまったが、この爺さんだけはしぶとく生き残ったってわけだ』

『車椅子にのっていた理由は病気か?』

『そこまではわからない。背中を撃たれたからって説もあるが、眉唾だ』

『警察にも顔がきくようだ』

警視庁の畑山から自分のことを聞いたという言葉を思いだし、キリは打った。

『反社会的勢力との交渉を任されていれば、自然に情報が集まってくる。その情報ほしさに近づくお巡りもいるだろうさ』

『もうひとつ調べてもらいたいことがある』

『二件分の料金になるぞ』

『かまわない。ニュージーランド人のトマス・リーという人物に関する情報がほしい。クイーンズタウンの住人で、職業はフィッシングガイドだ。英文があまり得意じゃなかったんで、もしかすると別の国からの移民かもしれない』

『クライアントか?』

『に、なる予定だった人物だ』

キリはリーからきた最初の依頼メールを佐々木に転送した。

『あんたはラッキーだ。今夜は他にしなきゃならんことがない。すぐにとりかかる』
『よろしく頼む』

やりとりが終わると、風呂に湯がたまっていた。

古いタイル貼りの浴槽に体を沈め、目を閉じた。爆発直後のレストランのようすがよみがえってくる。

落ちていた指にはまっていた指輪を、はっきり思い出すことができた。金でできた何かの紋章のようで、中に赤い石がはまっていた。

そういえばリーは、自分の写真を送ってきていなかった。警護を依頼しようとする人間の、すべてではないが、三人に二人は、自分の写真を送ってくる。待ち合わせたときにまちがわれたくないからだろう。そしてキリにも写真を送ってほしいと頼む。

写真は送らず、服装をキリは伝える。ホームページにも自分の顔はさらしていない。ボディガードをする上で、顔を知られるのが決してプラスだとは思えないからだ。

クライアントにびつたりと寄り添うばかりがボディガードではない。少し離れた位置で、無関係を装いながら警護にあたるときもある。襲撃者に前もってボディガードの顔を知る機会を与えるのは得策ではない。

睦月とトマス・リーは、どういう関係だったのだろう。

キリははっとして目を開いた。リーという姓、たどたどしい英文メールから、中国系の移民だと考えていたが、日本人だったのではないか。

身許を隠すために中国人風の偽名を使い、ニュージーランドで暮らしていた可能性もある。

トマス・リーの前身が日本人なら、日本で警護を必要としたのも頷ける。日本人だった時代に買った恨みを恐れていたのだろう。

風呂をでて、室内着を兼ねたスポーツウェアを着たキリは、新たなメールが届いていることに気づいた。佐々木にしては早すぎる。

メールは、来週のクライアントからだった。予定が変更になり、依頼をキャンセルしたいとある。こちらの一方的な都合でのキャンセルなので、三週間ぶんの警護料は支払う。明日、口座に振りこむ、とあった。

キリはメールの文面を見つめ、息を吐いた。

「大丈夫だ。君の時間は確保する」という睦月の言葉の意味はこれだったのか。

仕事をキャンセルしてきたクライアントは、M & Aを専門とするインド系アメリカ人の弁護士だ。やり手だが血も涙もない仕事ぶりで、あちこちに恨みを買っている。加えて金にはシビアで、一方的なキャンセルだからといって、三週間ぶんの警護料を全額払うような真似など、およそそうもない人物だった。

その弁護士に圧力をかけたのだとすれば、睦月の影響力は相当なものだ。

卓袱台の前にあぐらをかき、キリは缶ビールのプルタブを開けた。夕食をとっていないが空腹感はない。三日間まるまる絶食しても動き回れるし、一日二時間の睡眠でひと月過ごすこともできる。筋肉をつけすぎた体は栄養や休息がそれだけ必要になると、キリを鍛えた古武術の師匠はいつた。仙人のような細い体つきながら、ワイヤーのように頑丈でしなやかな筋肉をもっていた。

同じような筋肉をつけるためには、今ある筋肉をすべて落とせといわれ、絶食をして骨と皮だけ

になり、そこから地獄のトレーニングが始まった。

筋肉とともに持久力も失った肉体で山を駆け、野宿し、息も絶え絶えになるまで自分を追いこむ。睡眠はこまぎれで、一時間ぶつ通しで寝かせてもらえればましなほうだった。食事は、粥とわずかな木の実、干し魚くらいだ。

やがて幻覚を見るようになり、それから鍛錬の本番だった。

幻覚を敵に、突き、蹴り、受け身を学び、そのあいまに師匠の本物の突きや蹴りが襲いかかってくる。

飛んでくる拳を幻覚だと思っていると、したたかに体を打たれ、木から落下した。

鳥取の大山が修行の場だった。

師匠は弟子を一度にひとりしかとらず、納得するまで「卒業」を許さなかった。

じきに九十歳になるが、今も弟子を育てている筈だ。

これまでに何人が師匠のもとを「卒業」したのか、キリは知らない。弟子のいない時期もあったので、十人いるかどうか、だろう。

キリ自身、同じ古武術を使う者と会ったことはない。

パソコンが鳴った。佐々木からのメールだ。

トマス・リーというニュージールランド人に関する情報は、この五年間に限られる。フィッシングガイドを開業したのは二年前で、その前の三年間は別のガイドのアシスタントをつとめていた。出生地は台湾となっているが、台湾のどこで生まれ育ったかを知るデータはない。家族はおらず、クイーンズタウンでひとり暮らしをしている。

写真が添付されていた。マスらしき大きな魚とフライロッドを抱えた東洋人の男だ。年齢は五十代の後半から六十代の初めといったところだろう。

その右手の中指に、あの指輪がはまっていた。

キリは息を吐いた。クレタホテルのレストランで焼死したのは、やはりトマス・リーだったようだ。

そして自分は陸月の依頼をうけることになるだろう。

佐々木に情報料を振りこむ手続きをして、キリは空になった缶を握りつぶした。

4

二度めの赤坂警察署では、金松と杉田が待っていた。

「あの若いのはどうした？」

「別の件にひっぱりだされてる。この事案は捜査終了だ」

金松がいった。

キリはプリントアウトしたメールと佐々木から送られてきた写真を手渡した。

「同じ指輪だ」

金松は目を落とし、

「この写真はどこで手に入れた？」

と訊ねた。

「リーが三年間アシスタントをしていた、別のフィッシングガイドのホームページだ」

キリが佐々木から教わった情報を告げると、金松は頷いた。

「道理で。トマス・リーのホームページはあるにはあったが、魚や川の写真ばかりで、自分の写真はなかった」

「捜査終了というのは？」

「検証の結果だ。爆発の原因ははっきりしないが、事件性はないと判断した。おそらく厨房で微量のガス漏れが継続していて、建物の構造のせいで、奥のテーブル周辺に滞留していた。それが何かの弾みで引火したのだろうという話だ」

「鑑識がそういつたのか」

「正直、すっきりはしないが、テロや犯罪を裏づける証拠がないんだ。お前に警護を依頼していたというのが、唯一、犯罪の可能性を匂わせちゃいるが」

「リーの情報は五年前までしかさかのばれない。おそらく別の国の人間で、過去を消すためにニュージーランドに移住していた」

写真を見ていた杉田が顔をあげた。

「中国人か？」

「日本人かもしれん。日本でボディガードを頼むとしたら、日本人だろう」

金松がいった。

「調べられるか、この写真で」

キリは訊ねた。

「やれなくはないが、難しいし時間もかかる。悪いが、そこまで暇じゃない」

キリは頷いた。

「ところで睦月という人物を知っているか？」

金松は首をふった。

「いや、誰だ？」

「知らないやいい」

「この事案に関係しているのか」

杉田が訊ねた。

「関係しているようだが、理由はわからない」

「何だ、そりゃ」

「忘れてくれ」

キリは告げた。疑わしげに金松はキリを見つめた。

「隠していることがあるな」

「あるとしても捜査終了なのだろう」

金松は横を向き、舌打ちした。

「嫌な野郎だ。もしこれが殺しだとわかって、俺に知らせるなよ」

「わかった」

キリはいつて立ちあがった。

「ご協力感謝します。ご足労をおかけしました」

杉田が口調を改め、告げた。

赤坂警察署は国道二四六号線に面している。そこに黒のアルファードが止まっていた。陸月の車だ。

かたわらに立つ大男がスライドドアを引き開け、乗れと合図をした。キリが言葉にしたがうと、外からドアを閉め、運転席に乗りこむ。

アルファードは発進した。

キリは車椅子の前の座席に腰をおろした。

「俺の時間を作ったのはあんたか？」

「シン氏の件なら心配はいらない。ギャランティの保障はされる筈だ」

陸月がいった。キリは息を吐いた。シンというのが、弁護士の名だった。

「力があるのを見せつけたわけか」

運転席の大男がふりかえった。

「死にたいのか」

抑揚のない声でいう。陸月は無言だ。

キリは大男に目を向けた。

「俺から、あなたのボスに仲よくしてくれと頼んだわけじゃない。口のききかたが気に入らないから殺すというなら、試してみたらどうだ。殺せるかもしれんが、そっちもつらい思いをするぞ」

くつくつく、と喉の奥で陸月が笑った。

「さすがだ。如月、いかにお前でも、この男には手こずる筈だ」

如月と呼ばれた大男は目の奥に怒りの炎を点していた。

「試してもいいでしょうか」

「今は許さん」

如月は目を閉じ、大きく息を吐いた。

「承知いたしました」

前を向いた。キリは陸月に目を戻した。陸月は軽く首を傾げた。いうことはあるか、という表情だ。

「憎まれ口を叩きたいわけじゃない。あんたとトマス・リーの関係を教えてくれ」

陸月はにやりと笑った。

「私の依頼をひきうけてくれるのだな」

「ひきうけるまでクライアントをなくされても困る」

陸月は首をふった。

「負けず嫌いの男だな。年齢も経歴も不詳だが、ボディガードの腕は一流といわれるだけのことはある」

キリは無言だった。陸月はつづけた。

「トマス・リーは、かつて私のパートナーだった。誤解のないようにしておくが、性的な意味ではなく、ビジネス面での相棒という意味だ。私たちはコンビで多くの仕事をした。そのときの蓄積が、現在の私の土台となっている」

「何の仕事をしたんだ？」

「単純に言えば交渉人、ネゴシエーターだ。面と向かって交渉の座につきたくないクライアントにかわって意見の調整をおこなう。多くは金銭面での交渉だったが、中には命にかかわるものもあった。そういう場面で、彼は抜群の能力を発揮した」

「抜群の能力？」

キリは訊き返した。

陸月は記憶をたどるように目を閉じた。

「トマス・リーの本名は増本貢介という。私たちは不死身といわれていた」

「何が不死身だったんだ？」

「私たちは、何度も命を狙われ、そのたびに生きのびた。私は見ての通り、体が不自由で、まったく戦えない。増本がすべてに対処したのだ。銃で狙われたことは何度もあったが、今度こそ助からないと思ったとき、弾丸が発弾なかった。乗りそこねた飛行機が墜落したこともあるし、中東のレストランで爆弾テロがあったときは、たまたま電話をかけるためにその場を外していた」

「強運の持ち主だったのだな」

「ただの強運では片づけられない、何かをもっていた」

「だが、仕事をやめた」

キリがいうと、陸月は頷いた。

「六年前だ。運を使い果たす前に引退したい、といって。私は止めなかった。増本には釣りという、残りの人生を楽しむ術があった。私は最高のボディガード兼パートナーを失った」

「ボディガードには困ってないようだが？」

キリは助手席の如月を見やっていった。

「如月は確かに腕が立つし、私に忠実だ。だが、増本ほどの強運をもっているかといえば、さて、わからない」

陸月はいい、微笑んだ。

「そんなに運が大切なのか」

「君に理解できなくても不思議はない。私は、ただ生きのびるために運を必要としているわけではない。私のように、人と人のあいだをとりもつ仕事をするには、何より運が必要なのだ。早い話、片方がその日の朝夫婦喧嘩をして虫の居どころが悪いというだけで、交渉が決裂することもある。それを運と呼ばずして、何という？」

キリは無言で首をふった。陸月の饒舌が生来のものなのか、演技なのか、見抜けない。

「増本がいなくなり、私は用心深くなった。以前よりさらに人前にでなくなり、自分の名が、たとえ通名であっても人の口の端にのぼるのを避けるようにしてきた。ひきかえ増本は、日本人でなくなったこともあり、自由を謳歌していたようだ。写真こそホームページにあげていなかったが、世界中からやってくる釣り人の世話を焼くのが生き甲斐だといって」

「まめに連絡をとっていたのか」

キリの問いに陸月は首をふった。

「私たちは二人ともいい大人だ。年寄りといってもいい。そんな人間が始終連絡をとりあっていたら、気持が悪い。思いだしたようにメールをくれた。釣った魚の写真といっしょにな」

「ボディガードを紹介してほしいとあんたに頼んだとき、トマス・リーはその理由を話したか？」

キリが訊ねると、睦月は微妙な表情になった。

「話したといえど話した。だが……」

キリは睦月の言葉を待った。やがて息を吐き、睦月はキリに告げた。

「自分は呪われている、といった」

「呪われている？」

睦月は頷いた。

「誰に呪われているのだと私は訊ねた。それが三カ月前で、そのときは珍しく、増本は電話をかけてきた。それだけ、切羽詰まっていたようだ」

「それで返事は？」

「呪いのプロだ、といった。つまり彼に恨みをもつ人間がプロに依頼して、呪い殺そうとしているのだと」

キリは息を吸いこんだ。

「君は聞いたことがあるかね？ 呪殺のプロという存在を」

「海外ではそういう仕事があると聞いたことはあるが、この日本ではない」

睦月は頷いた。

「私も同じく聞いたことはない。まあ、呪いに距離は関係ないだろうから、海外の呪術師に頼んだとしても呪殺できるかもしれないが」

「呪殺が可能なら、ボディガードに意味はない。ボディガードにできるのは、肉体的な攻撃に対する防衛だけだ」

キリはいった。

「いわれてみれば、確かにその通りだ。が、増本があまりに真剣だったので、腕のいいボディガードを捜すという約束をせざるをえなかったのだ」

「トマス・リーは、迷信深い人間だったのか？」

「かつては運やジンクスといったものをまるで信じていなかった。だが話したように、間一髪で命拾いをする場面にであううち、かえって運を信じるようになった。奇妙な話だが、強運に救われるたびに、自分の運をすり減らしていると感じていた。いつてみれば、運のもちあわせを使い果たしてしまうのではないかと恐れていた」

「それが引退につながったのか」

睦月は深々と頷いた。

「六年前、私と増本はシンガポールにいた。日本を捨てた、ある大金持との交渉を依頼されたのだ。だがそれは罠だった。大金持を交渉の場にひきだして暗殺しようと企てた者たちが、金融機関の人間と偽って、私と増本をシンガポールに送ったのだ。もちろん私たちはそれを知らず、雇われた殺し屋集団が全員の命を奪う手筈になっていた。だが、交渉の場となっていたホテルを、我々とは無関係なテロリストが襲い、警備員を装ってその場にいた殺し屋のグループを射殺したのだ。結果、私たちは暗殺を逃れ、それが罠であったことを知った。すべては偶然だ。テロリストがそのホテルに襲撃をしかけたことも、殺し屋グループが標的にされたことも、だ。ありえないほど低い偶然が重なり、私たちは命を拾った。シンガポールから帰国し、すべてが明らかになると、『これで終わりだ』と増本はいった。『これ以上俺は、運を使えない』と」

「自分の強運が命を救った、と考えたのだな」

「他にどうとらえればいい？ 確かにそのホテルには何百人、いや千人を超す人間がいたかもしれないが、命を狙われていたのは三人だけだ」

キリは黙っていた。睦月はつづけた。

「ただ一度だけなら、偶然ですませられたろう。が、二度や三度ではなく命を狙われ、そのたびに生きのびたのだ。ボディガードとしての増本の腕に救われたこともあったが」

「腕もたったのだな。運だけでなく」

「もちろんだ。交渉の場で刃物をつきつけられたり、暴漢にとり囲まれるなど、かつては日常だった。増本は、難なくその者たちを素手で排除した」

「訓練を受けていたのか」

「詳しいことは私も知らない。増本と知りあったのは今から三十年近く前で、私は四十を過ぎたばかり、増本に至っては三十になっていたかどうかだった。当時は暴力団と銀行が堂々と手を組んでいた。私はある銀行の不正を糾弾する側にいた。むろん落しどころを用意した上で、だ。ところが暴力団は、私を消すつもりでいた。増本は、その銀行の幹部のボディガードをつとめていたのだが、銀行のあくどさに嫌けがさし、裏切って私のボディガードを自ら買ってでた。当初、私は彼を信用しなかった。彼はいったものだ。『悪い奴と手を組むのはかまわない。だがきたない奴は御免だ』。安っぽい表現だが、増本には一本筋が通っていた」

「極道じゃなかったのか」

「極道には向いていない人間だった。白いものを、上から黒といわれて、はいそうですかとはいえ

ない。体だけで世渡りをするのにはかしこすぎた。組んでいた頃、増本はよく、『あんたが頭で俺が手足だ』と私にいったが、実際には何度も私は増本に助言を求めた。世間的には、私のただのボディガードのようにしか思われていなかったが、それを気にもしなかった。あれほど信用できるパートナーはいなかった」

しみじみとした口調だった。

「だから引退したいといわれたときは、止められないと覚悟した。寂しくもあったし不安も感じたが、関係を解消した」

「家族はいたのか」

「若いときに結婚し、十年ほど前に離婚した。子供ももうけていたようだが、別れた妻が引きとった」

「子供と連絡はとっていたか？」

「わからない。私と組んでいたときは、一切子供について口にしなかった。弱みを知られたくなかったのだろう」

「弱み？」

「そうだ。いわなくとも子供を大切に思っていることは伝わってきた。だからこそ、敵対する勢力に存在を知られ、人質にとられるようなことは絶対に避けたかったのだと思う」

「すると引退してからは子供に会っていた可能性もあるのだな」

キリの言葉に、睦月は間をおいて頷いた。

「かもしれない。なぜだ？」

「彼が乗ってきた飛行機だ。待ちあわせは昨日の午後だったが、それには前日に到着する飛行機に乗る必要がある。二十四時間近くを、彼はボディガードなしで日本で過していた。その間に子供と会っていたのかもしれない」

睦月は息を吐いた。

「なるほど。増本のことだ。子供のことは、ボディガードにも教えたくないと考えたのかもしれない」

「話を整理しよう。トマス・リーこと増本貢介は、かつてあんたのパートナーで、裏の交渉人をやっていた。二人は強運のもち主で、何度も絶体絶命の危機を脱してきた。それがゆえに、増本は自分の運がすり減っていると考え、尽きてしまう前に引退した」

「その通りだ。増本は、あるときから運がすべてを支配するという考え方をするようになった」

キリは睦月を見つめた。

「何度も殺されそうになった男が、呪いを恐れるというのが理解できない」

「何度も殺されそうになり、そのたびにぐり抜けてきたからこそだとは思わないか。自分の運は細り、残りわずかだ。だから呪われただけで死んでしまう」

キリは首をふった。

「呪われて病気になる、というのならまだしも、火事で死ぬことなどありえない」

「警察の見解は？」

「事故だということになったが、本当のところは不明らしい」

睦月はキリを見返した。

「君は現場を見た筈だ。何が起ったのだと思う？」

「火事が起きたことはまちがいない。が、人間が黒焦げになっているのに周囲は燃えていなかった」

睦月は目を細めた。

「黒焦げだったのか」

「人間の体だとわかったのは、落ちていた指だけだ」

睦月は目を閉じた。

「そうか」

「あれが呪いのせいだというなら、呪いで人を燃やせることになる」

「だが警察は原因をつきとめられなかったのだろう」

「もつともらしい理屈はあった。ガス漏れが起きていて、それが店のある部分にたまり引火した、と」

「信じるかね」

「呪いよりはまだ信じられる」

睦月は大きく息を吸いこんだ。

「君にそれを調べてもらいたい。増本は、呪殺のプロに自分は狙われているといていたが、それがどんな人物なのかはわからない。しかもプロというからには、呪殺を依頼した人間もいたことになる。それも誰かはわからないのだ」

キリは気づいた。

「もしかすると同じプロがあんたを狙うかもしれない？」

陸月は頷いた。

「それもある。誰かが殺したいほど増本を恨んでいたとすれば、それはたぶん私と組んでいた頃に買った恨みだろう。ならば私が同じように呪われても不思議はない」

「じゃあ心当たりがあるのじゃないか」

陸月は笑みを浮かべた。

「ありすぎてわからない。ただひとついえるのは、これまで一度も、呪殺のプロなどという人間とかわったことはない」

キリも同じだった。

「調べるといっても俺は調査を仕事にしているわけじゃない」

「君ならできるだろう。君の警護は先手を打つことで知られている。つまり襲撃者の先回りをするのだろう？」

「それと調査はちがう」

「三週間、君の時間を作った。それで結果をだせなければ、しかたがない」

キリは陸月を見つめた。

「結果がでたときにはもちろん報酬はだす。一千万でどうだ？」

「それは結果がでたときでいい」

キリはいった。

「如月」

陸月がいい、如月がうしろをふりかえって携帯電話をさしだした。

「私とつながる電話だ。いつも身につけていてほしい」

キリはうけとった。

「あんた以外に増本のことを訊ける人間はいるか」

陸月はわずかに考え、

「古いつきあいの弁護士がいる。私と組むようになる前からの知り合いだった筈だ」

向坂士郎という名を口にした。

「移っていなければ、虎ノ門にオフィスをかまえている筈だ」

「向坂弁護士だな」

「向坂に言えば、増本の昔の話を聞けるかもしれない。私と増本は、パートナーであったがゆえに、互いにプライベートな話はしなかった。わかるか」

「どちらか片方がつかまって弱みを握られないようにするためか」

陸月は頷いた。

「あの頃は、土地の値段に比べると、人間の命はひどく安かった」

バブルの頃、表にはでないだけで極道や闇金融、さらには地上げを拒んだ地主が秘かに大量に殺されたという噂がある。

大半は尾鱈がついただけの『伝説』だが、今よりは簡単に、億単位の金が、それも路地裏で飛びかっていたのだ。まったくありえないともいい切れない。

アルファードが止まり、スライドドアが開いた。品川駅の近くだった。陸月はキリの住居も知っ

ているようだ。

「よろしく頼む」

その言葉を背中で聞き、キリはアルファードを降りたつた。